研究紀要第４集の刊行に寄せて

茨城県教育研修センター　所長　猪瀬　宝裕

令和３年度、茨城県教育研修センターは「教職員の学びを止めない」ことに徹底してこだわりました。実際、令和３年度の講座実施率は 98.9%でした。しかし、実施に当たっては困難の連続であり、所員の努力と想いのなせる業でした。

当初、集合研修は 253 日予定したが実際は 143 日（52.4%）でした。その一方で、オンライン研修は当初予定した 13 日から 120 日（44.0%）へ大幅に増加しました。しかも、本センターで行うオンライン研修はすべて双方向型で行われるので、講座担当者の苦労は大変なものでした。

感染状況によって集合研修継続が困難と判断し急遽、オンラインに変更するということもありました。受講者への周知や準備などを考慮し、約２週間前には決定する対応を取りましたが、担当者にとっては必ずしも十分な準備期間ではなかったと思われます。

令和３年度においてコロナ対応は常に意識して研修の運営に当たる必要があり、所員には「いつでもオンラインに対応できるように研修を設計しておくように」と指示をしていました。しかし、どちらにも対応できる研修などなく、講座担当者はその都度修正変更を余儀なくされていたものと思います。

所員の工夫と努力は、受講者からのアンケート結果に表れています。研修に対する満足度（よくあてはまる、あてはまる、の合計）は、集合対面研修が 99.1%に対しオンライン研修は 98.7%でした。困難な状況下であっても先生方に研修を届けたいというセンター所員の想いが通じたように思います。研修成果の面でも、オンラインの弱点を工夫と努力によってかなりの程度軽減し、オンラインの強みを引き出すという研修の構成や運営の努力によって高い満足度を実現しているので、十分な成果を挙げることができたと考えています。

研究紀要第４集掲載の４本の論稿は、今年度の研修講座の設計や運営の工夫、実践を記録、分析した内容となっています。

「行動変容を促す教員研修のデザイン」が本センターの研修運営のメソッドとも言えるものです。本センターでは、研修の目的は受講者の「行動変容」を促し、授業行動の変容によって児童生徒が楽しく学ぶ、授業が分かる、学校が楽しくなる、さらには先生方が達成感や充実感、満足感を得、自信をもって教員を楽しむためと考えています。その基本が示されています。

「体育のオンライン授業の可能性を探る」は、緊急事態宣言下における体育授業の「オンライン体育授業」化を模索した中学校及び本センターのオンライン研修での実践です。実技教科でどのようにオンライン化すると効果的なのか、またオンラインの特性の強みを生かすなどの視点が参考になります。

「図画工作・美術科教育研修の意味や価値の創造」は、コロナ禍の不安定な状況下でも受講者に価値のある、意味のある研修を届けたいという想いをもって令和３年度に実践した

取り組みです。中でも、「授業参観ライブ配信」や「実技　オンライン粘土」はオンライン研修に急遽変更となった研修を受講者の視点で再構成し工夫して実施した労作と言えます。さらに、学校に一人しかいない美術教員が集まって相談できる枠組みを提供するため、Google Classroom で「図工室・美術室」を開始した取り組みは今後の研修の在り方も含め示唆に富んだ取り組みです。本センターでは、こうしたプラットフォームを提供する取り組みが他教科、専門職研修などへ波及し進んでいます。

「教科「情報」の在り方について」は、先日東京大学が 2025 年度（令和 7 年度）大学入学者選抜大学入学共通テストの利用教科・科目に「情報」を新たに加える予告を公表し、関心が高まっている教科「情報」についての論稿です。令和 4 年度からの「情報Ｉ」の円滑な実施に向けた本センターの取り組みや指導する教員の課題への対応などについて、今後の見通しと共に述べています。

これらの論稿は、センター職員が「教職員の学びを止めない」、その一心でコロナ禍における授業や研修の在り方などを絶えず工夫改善を行ってきた成果です。

ぜひ、ご一読いただき、ご意見やご感想などお寄せいただければ幸いに存じます。